OUHS
OSAKA UNIVERSITY OF HEALTH AND SPORT SCIENCES
スポーツ
大体大
第42号
発行責任者
大阪体育大学広報室
室長　大坪康巳
編集長
大阪府泉南郡熊取町朝代台1-1
電話（072）453－7021
FAX（072）453－8818
協力＝教育後援会・学友会

アダプテッド・スポーツ部

内田パリ出場

水上競技部

宇津木

パリ2024パラリンピック競技大会は８月28日から９月８日まで12日間開催され、22競技549種目に選手4400名が参加する。大阪体育大学からは水上競技部女子の宇津木美都（教育４年･京都文教）とアダプテッド･スポーツ部の内田峻介（同・山口南総合支援）が出場する。

宇津木は2021年東京大会に続く出場、内田は初出場となる。本学からの歴代のパラリンピック出場は先日、引退を発表した山本篤・本学客員教授を含め、３人となる。２人ともメダル獲得に照準を合わせる。

「出場資格なし」一転「あり」

生活すべて水泳に捧げ自己新

2人にエールを！パラ大会での両選手の健闘を祈ります

「目標は100㍍平泳ぎの表彰台。入賞とメダルではまったく違う。4位は一番嫌な順位です」。宇津木はそう断言する。

3月に静岡県富士市で行われた日本代表推薦選手選考競技会の100㍍平泳ぎ（SB8）で、アジア新記録となる1分25秒23をマーク。派遣標準記録A（1分25秒55）を突破し、出場が内定した。

中学3年以来、実に7年ぶりとなる自己ベスト更新となった。なぜ実現できたのか。宇津木は「2か月間、食事も練習もすべてを水泳に注いできた」と語る。練習に一切妥協せず、平泳ぎでの自分の感覚、映像、浜上洋平監督や川島康弘部長の言葉に集中し、練習した。「体は1か月半前からできあがる」として選考会から逆算し、独り暮らしでの栄養管理も徹底した。合宿などで友人から食事に誘われても断った。12月に母校の小学校で約1か月間教育実習に臨んだ後は、これまでの大学生活で経験したことがないほど、生活のすべてを水泳に捧げた。

1年生の時、コロナ禍のため1年延期された東京パラリンピックに出場し、100㍍平泳ぎで6位に入賞した。「1年延期がなかったら、東京大会には確実に出場できていなかった」と語る。

中学時代に自己ベストをマークしたが、高校ではタイムを落としてスランプが続き、泳ぐことが嫌になったこともあった。本学に入学して浜上監督とフォーム改造に取り組んだことで、スランプを脱した。

東京大会後は、昨年7～8月のパラ水泳世界選手権（英国・マンチェスター）で1分27秒88をマークし4位に入った。10月のアジアパラ競技大会（中国・杭州）では競泳日本代表の主将を務め、100㍍平泳ぎなど4種目で銀メダルを獲得。順調に結果を出す一方で、小学校などからの講演依頼も相次ぎ、積極的に応じる。

競泳チームは8月10日、フランスに向けて出発し、北部のアミアンで合宿をした後、選手村に入る。

宇津木は「大学入学までは

スランプに苦しんだが、いろんな人のおかげでここまで戻ってこられた。自分をやる気にさせてくれた浜上先生には感謝しかない」と話す。浜上監督は「スランプから復調しての7年ぶりの自己ベスト更新は、とても感慨深い」としたうえで、「大学4年間の目標はメダル。貪欲にメダルを狙ってほしい」と期待する。

閉ざされかけた扉が開き、内田はパリ大会の出場権をつかんだ。

昨年12月、国際大会でのクラス分け審査で「出場資格なし」（NE）と判定された。内田のクラスは重度四肢機能障がい（非脳原性疾患）のBC4。NEと2回判定されると、その判定が確定するため、3月の代表選考会への派遣も見送られた。しかし、4月30日開幕のワールドカップ（カナダ）に派遣されて「出場資格あり」と判定が覆る。6月、World Bocciaの世界ランキングに基づき、7位の内田に出場枠が割り当てられた。

内田は中学2年からボッチャに本格的に取り組み、中学3年だった2017年、国を挙げた有望選手の発掘事業「ジャパン・ライジング・スター・プロジェクト」1期生に。高校1年の2018年、日本選手権で準優勝した。

2021年、大阪体育大学に入学。東京パラリンピックは日本代表の座を逃したが、開会式で聖火に点火する大役を務めた。2022年、世界選手権に初出場し、日本選手として世界選手権史上初となる金メダルを個人で獲得し、ペアもベスト4。2023年のワールドカップは個人で銀メダル、ペアで銅メダル。大学では、アダプテッド・スポーツ部で、東京パラリンピック日本代表コーチを務めた曽根裕二監督の指導を受ける。

「出場資格なし」と判定された12月、内田は「悔しい気持ちでいっぱいだった」という。これまで各大会で積み上げてきた結果がなくなる気がした。大学生活での大きな目標だったパリ出場が判定によって閉ざされた。「自分はこれからどうなるんだろうと不安な気持ちでいっぱいになった」と振り返る。それでも、曽根監督や部の仲間ら周囲に励まされ、「今、自分でできることに全力を尽くそう」と今年1月の日本選手権に臨み、3連覇を達成して号泣した。

内田は「1年間すごくうれしいこともあったし、苦しい時期もあった中で皆さんに支えられた。すべての方々に感謝しかない」と話す。

パリでは、世界選手権金メダリストとして期待がかかる。「少しでも皆さんに感謝の気持ちが伝わればいいと思うので、本当にメダル獲得を目指していきたい」と意気込む。

日本選手権　コーチとして帯同した先輩の米田陵司さんとツーショット

日本選手権優勝後の涙

ハンドボール部

春季L 20季連続 43回目優勝

関西学生ハンドボール春季リーグ

ハンドボール部女子は4～5月の関西学生ハンドボール春季リーグで、20季連続（コロナ禍による中断をはさむ）43回目の優勝を果たした。

主将置かず全員ハンド

女子 田中良コーチは春季リーグについて「誰にもチャンスがあり、春までのそれぞれの課題を解決できたかできなかったが、浮き彫りになる大会」と話す。リーグの個人得点ランキングで、本学は8位が最高。多くのメンバーが日替わりで出場した。

その中で、最優秀選手に中村理乃（体育4年、神奈川・高津）、優秀選手に中尾藍（スポーツ科学1年、京都・洛北）、高来葵美（体育3年、石川・小松商業）が選ばれた。中村は、これまで楠本繁生監督から課題として指摘されていた、GKとしてのDF陣への指示を強く意識して改善し、結果を出した。

中尾は175㌢と長身のうえ体格も良く、強いシュートが打て、チャンスでの位置取りにも優れる。ピボットだけでなく幅広いポジションをこなせる選手だ。高来は練習熱心で、巧みにシュートを放つ。

今季のチームは、日本代表の石川空（体育4年・大分鶴崎）、吉野珊珠（同・名古屋経済大学市邨）が最上級生となり、新戦力として中尾のほか、いずれもU20日本代表の川崎美羽（スポーツ科学1年・東京・佼成学園女子）、東瑚華（体育2年・千葉・昭和学院）らの活躍が期待される。

また、チームは誰かに頼るのではなく、全員で話し合える点が特徴で、あえて主将を置いていない。練習で良くなかった点は全員で指摘している。

田中コーチは「今年のチームはまだ何も結果を出していない。昨年と同じことをしていては勝ち抜けない」。11連覇に向けて、ハイレベルでの切磋琢磨が続いている。

中村理乃（体育4年・神奈川・高津）

中尾藍（スポーツ科学1年・京都・洛北）

高来葵美（体育3年・石川・小松商業）

吉野珊珠（体育4年・名古屋経済大学市邨）

連覇逃すも 全国V向け一丸

ハンドボール部男子は4～5月に開催された関西学生春季リーグで、関西学院大学と8勝1分けで並んだが得失点差で2位となり、連覇は4季で止まった。

男子 今季は関東、東海の強豪約10大学がそろう3月の山梨合宿で優勝。翌週の函館合宿も好成績だったが、春季リーグではけがなどで主力選手が複数欠場し、不安を抱えてのスタートとなった。

全勝同士で迎えた最終節の関西学院大学戦。後半、大黒柱の荒瀬廉（体育4年・神戸国際大学附属）がレッドカードで退場となったが、ほとんど出場経験のなかった林田凌和（体育2年・熊本・九州学院）、門田晃季（同・大阪体育大学浪商）が好プレーを連発。リードのまま試合は終了に近づいた。

34―33で逃げ切りかと思われたが、単発のシュートが入らず、攻撃権が相手に移る。残り5秒。相手がタイムアウトを取り、GKが加わる7人攻撃も警戒したため、相手エースをマークしきれなかった。残り1秒で同点ゴールを決められ、34―34、得失点差で83回目となる優勝を逃した。

下川真良監督は「連覇を逃したのは残念だが、春季リーグで良かった。ここで、気を引き締めたい」と語る。

春季リーグで新人賞を獲得した橘光太郎（体育2年・大阪体育大学浪商）はU―21日本代表に選ばれた。

6年ぶりの全日本インカレ優勝に向けて、下川監督は「泥臭さ、ルーズボールをしつこく拾うことが1点につながる」と話す。レギュラー、控えのチーム全員が勝ちたい気持ちを高く持ち、モチベーション高く一生懸命に練習している姿を強く感じるという。V奪回に向けてチームの雰囲気は上向きだ。

荒瀬廉（体育4年・神戸国際大学附属）

前川大樹（体育4年・長崎・瓊浦）

下川陽向（体育3年・大阪体育大学浪商）

橘光太郎（体育2年・大阪体育大学浪商）

ハンドボール女子パリ五輪世界最終予選

おりひめジャパン パリ五輪出場ならず

ハンドボール女子のパリ・オリンピック世界最終予選（トーナメント1）は4月、ハンガリーで行われ、楠本繁生スポーツ科学部教授が率いる日本は、1勝2敗、勝ち点2で出場4か国中3位となり、1976年モントリオール五輪以来48年ぶりとなる自力での五輪出場は果たせなかった（自国開催で出場した2021年東京五輪は除く）。

日本代表には、大阪体育大学から楠本監督をはじめ、メンバー20名のうち、体育学部4年の石川空（大分鶴崎）、吉野珊珠（名古屋経済大学市邨）のほか、本学卒業生13名が参加した。

予選は4か国が総当たりで対戦し、上位2か国が五輪出場権を獲得する。日本は初戦で世界選手権4位（日本は17位）の強豪、スウェーデンに28―35で敗れた。2戦目でイギリスを43―16で降したが、最終戦でハンガリーに28―37で敗れて3位に終わった。

【世界最終予選結果】
12日　スウェーデン●28―35
▽13日　イギリス○43―16▽
15日　ハンガリー●28―37

【順位】
①ハンガリー3勝、勝ち点6
②スウェーデン2勝1敗、同4＝以上五輪出場③日本1勝2敗、同2④イギリス3敗、同0

日本ハンドボール協会提供

バレーボール部

1部昇格の春「学生が成長」

無念の2部降格 秋季で全勝1部復帰めざす

関西大学バレーボール春季リーグ

バレーボール部男子は、関西大学バレーボール春季リーグ1部で1勝10敗の12位。2部への降格が決まった。

男子 4～5月のリーグ戦では初戦から連敗が続いた。しかし、7戦目の近畿大学戦は0―3だったが、第2セットは20―25、第3セットで22―25と粘りを見せた。8戦目はリーグ1位の天理大学と対戦し1―3で敗れたものの、上位チームから1セットを奪った。そして、9戦目の京都産業大学戦は3―1で今季初勝利。攻撃力のある出水充希（体育3年・大阪・大商学園）、山崎泰雅（体育4年・熊本・鎮西）が後衛からもバックアタックを打ち、チームを引っ張った。沼田薫樹監督は、「7戦目、8戦目での粘りが勝利につながった」と振り返る。

チーム技術ランキングでは、バックアタック決定率で5位。個人技術ランキングでは、アタック決定本数で、出水が2位、山崎が3位、アタック決定率で、山崎が10位にランクインした。

沼田監督は「レセプションが課題。まずは1本目のプレーが大事になるので、そこを徹底的に強化していく。9月に開幕する秋季リーグでは1セットも落とさず2部全勝を目指したい」と巻き返しを誓った。

高岡航輝（スポーツ科学1年・神戸学院大学附属）

山崎泰雅（体育4年・熊本・鎮西）

広瀬逸葵（体育2年・徳島・阿南光）

丹羽芙緒（体育3年・和歌山・開智）

関西大学バレーボール春季リーグ／西日本バレーボール大学女子選手権大会

バレーボール部女子は、4～5月の関西大学バレーボール春季リーグ1部を3勝8敗の9位で終えた。チーム技術ランキングでは、サーブレシーブ成功率で1位、サーブ効果率で2位、ブロック決定本数で2位。個人技術ランキングでは、徳永優奈（体育3年・福岡・誠修）がサーブレシーブ成功率で2位にランクインした。

女子 リーグ開幕戦の神戸親和大学戦では2―3で惜敗。続く龍谷大学戦、京都橘大学戦も0―3でストレート負けした。しかし、第4戦の大阪国際大学戦は3―1で初勝利。第1セットを失ったものの、徳永、山本千尋（体育4年・山口・誠英）らの強打で逆転した。

その後3連敗したが、関西大学戦、関西学院大学戦はフルセットの惜敗だった。第8戦の園田学園女子大学戦、続く関西福祉大学戦は3―1で勝利。第10戦の帝塚山大学戦では2―3、最終戦の帝塚山学院大学戦では1―3で敗れたが、1部昇格したリーグ戦を9位で終えた。

長江晃生監督は「大会中に学生が成長したことが収穫。接戦で惜しい試合もあった。サーブレシーブ成功率で1位を取れたのは学生が空き時間で自主練習したことが結果につながった」と振り返る。

7月の第50回西日本バレーボール大学女子選手権大会の決勝トーナメントでは、至誠館大学に0―2で敗れ、2回戦敗退となった。長江監督は秋に向けて「試合中のタイムリーな状況変化に対応できるようなチームづくりとアタック決定率を上げることが目標」と話した。

また、今季から「熊取町PRプロジェクト」を始動。公式ユニフォームの左肩に熊取町のロゴマーク、左袖にマスコットキャラクターを掲出するなど熊取町をPRした。

山川かりん（体育4年・鳥取城北）　徳永優奈（体育3年・福岡・誠修）

増田結子（体育4年・京都・北嵯峨）

黒木陽奈（体育2年・宮崎・都城商業）

西日本30年ぶり制覇 男女同時V

関西学生体操選手権大会／西日本学生体操選手権大会

体操競技部男子は5月の第74回西日本学生体操選手権大会で、30年ぶり2回目の団体総合優勝を果たした。女子も優勝し、男女同時優勝は史上初。4月の第66回関西学生体操選手権大会でも団体総合17連覇を果たし、部は上げ潮ムードだ。

男子　西日本学生は、個人総合で築山翔馬（体育3年・東京・相生学院）、田部壮一郎（体育4年・大阪・清風）がワンツー・フィニッシュ。種目別では、築山がゆか、あん馬、跳馬の3種目で優勝し、つり輪、鉄棒で2位。田部はつり輪で優勝し、ゆか、跳馬、平行棒で2位となった。

関西学生では、個人総合で1位の田部、2位の築山に続いてスポーツ科学部1年の川口碧雪（大阪体育大学浪商）が3位。本学から出場した9名が個人総合上位9位までを独占するなど他大学を圧倒した。種目別も全6種目で1～3位を独占。田部がつり輪、平行棒、鉄棒、築山がゆか、あん馬、跳馬を制した。

藤原敏行監督は「西日本では、選手は（5連覇中の）鹿屋体育大学に勝つという意識で練習してきた。築山、田部をはじめ選手全員が目標に向けてまとまった」と話す。築山は上級生になってチームを引っ張る意識が強まり、6種目を乗り切る経験値も増した。田部は昨秋から主将になり、誰よりも真しに練習する姿勢がチームに好影響を与えている。

1年の川口は器用さと同時に筋力もあり、6種目をこなせるオールラウンダーだ。昨秋から体操競技部の強化班に加わって練習し、成長著しい。

8月の全日本インカレに向けて、田部は主将として、史上最高の団体総合4位を目標に掲げる。関東の強豪も戦力が充実しているが、藤原監督は「今年のチームには、まだ夏までにも成長を続ける可能性を感じさせる力がある。そこが楽しみ」と話す。

築山翔馬（体育3年・東京・相生学院）

田部壮一郎（体育4年・大阪・清風）

川口碧雪（スポーツ科学1年・大阪体育大学浪商）

上山壱晨（体育4年・大阪体育大学浪商）

吉田壮輝（体育3年・福井・鯖江）

“One Team”で団体制す!!

体操競技部女子

関西学生体操選手権大会／西日本学生体操選手権大会

体操競技部女子は、4月の関西学生選手権（関西インカレ）団体総合で2年ぶり7回目の優勝。5月の西日本学生選手権（西日本インカレ）の団体総合も12年ぶり2回目の優勝。田原宏晃監督は「学生21人とシニア2人（ともに教務補佐）の23人が〝One Team〟になって勝ち取った成果だ」と振り返る。

女子　2、3月ごろはチームの調子が今一つ上がらず、改めて目標を「関西インカレは武庫川女子大学に勝って団体優勝。西日本インカレは中京大学、武庫川女子大学に勝って団体優勝」と定めて試合に臨んだ。

関西インカレでは団体総合は234・450点で、前年優勝の2位・武庫川女子大学に5・500点差をつけた。個人総合で北田絢女（体育4年・大阪・香ヶ丘リベルテ）が3連覇を果たし、横江恵（体育3年・滋賀・草津東）が3位。種目別も全4種目で1位を独占し、北田が段違い平行棒とゆか、横江が平均台で優勝。スポーツ科学部1年の山本夏菜（大阪・四天王寺）が跳馬を制した。

西日本インカレは、個人総合で北田が初優勝し、種目別は跳馬で山本夏、平均台で横江が優勝。北田は跳馬、ゆか、平均台で2位となった。

西日本インカレの団体メンバーには、1年次に全日本団体の権利を獲得したメンバーの北田、北川莉奈（体育4年・四天王寺）、大野帆加（体育4年・兵庫・姫路商業）と3年の横江、南涼華（体育3年・和歌山北）、1年の山本夏で挑んだ。北川は1年の秋にアキレス腱を断裂。手術、リハビリを乗り越え今年完全復活し、団体優勝に貢献した。団体優勝の裏には2度の前十字靭帯断裂を乗り越え、この夏、完全復帰を目指す加畑友里（体育3年・和歌山北）や関西インカレで団体優勝に貢献した梅永恋羽（スポーツ科学1年・滋賀・栗東）他、部員全員によるチーム力の底上げが今回の結果につながっている。また、この夏の全日本シニアの出場を目指しつつ、教務補佐の仕事をしながら学生のサポートをしてくれている柳川友紀さんと木下緋彩さんやOGの奥西絹代さん他、多くの方々により支えられている。

次のチームの目標は、3年ぶりの全日本団体選手権の出場だ。そのためには8月の全日本インカレでの上位進出が不可欠。田原監督は「7位だった昨年より戦力は整いつつある。西日本インカレに出場できなかったメンバーも虎視眈々と全日本インカレ出場に向け練習に取り組み、チーム力がより強化できているのが今の強み。チームの雰囲気が3年前に全日本団体選手権を獲得した時に近く、関西、西日本の勢いのまま、挑みたい」と意気込んでいる。

北田絢女（体育4年・大阪・香ヶ丘リベルテ）

横江恵（体育3年・滋賀・草津東）

北川莉奈（体育4年・四天王寺）　大野帆加（体育4年・兵庫・姫路商業）　梅永恋羽（スポーツ科学1年・滋賀・栗東）

好機逃しベスト8敗退

硬式野球部女子

全日本大学女子硬式野球選手権高知大会

硬式野球部女子は5月の第10回全日本大学女子硬式野球選手権高知大会に出場。準々決勝で敗れ、ベスト8だった。

今季のチームは内田陽菜（体育4年・福岡・折尾愛真）、柏崎咲和（体育3年・福井工業大学附属福井）の2本柱を軸にした投手力、児玉椛姫（体育2年・同）、荒川莉子（同・鹿児島・神村学園高等部）の三遊間など高い守備力が持ち味だ。

初戦は今春創部された新潟医療福祉大学に8－0で勝利。準々決勝で前年優勝の平成国際大学と対戦した。

一回1死満塁から木村睦実（体育3年・京都両洋）の犠飛で先制したが1点どまり。三回1死一二塁は後続が凡退した。先発の内田は大学女子では珍しい120キロ超の速球を軸に好投したが、五回2死三塁から連続長打を浴び、ワンチャンスを生かされ2失点。1－2の惜敗に、横井光治監督は「女子野球の人気が高まって各大学のレベルが特に守備面で急速に上がり、ワンチャンスを生かさないと勝てない。好機を逃したのが痛かった」と語る。

女子高校野球は3年前から全国選手権の決勝の舞台が阪神甲子園球場になり、阪神、巨人などプロ球団が女子チームを創設するなどの追い風で人気が高まっている。本学も今年、10人もの1年生が入部した。これまではソフトボール出身者も多かったが、現在はほぼ全員が高校で女子野球部に所属し、レベルの向上が著しい。

8月には和歌山県で全日本大学選手権大会が行われる。横井監督は「小技を含めた戦術を磨き、勝負強さを取り戻す」と3年ぶりの優勝を目指す。

木村睦実（体育3年・京都両洋）　内田陽菜（体育4年・福岡・折尾愛真）

後藤優華（体育3年・札幌手稲）

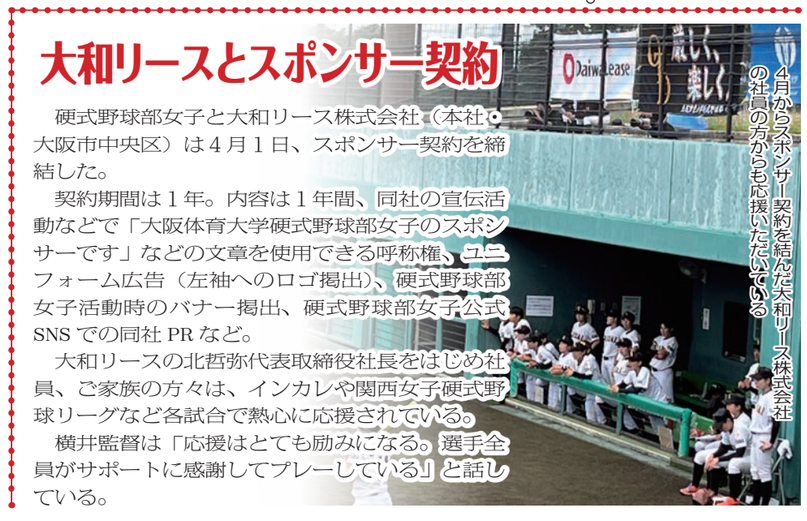
大和リースとスポンサー契約

硬式野球部女子と大和リース株式会社（本社・大阪市中央区）は4月1日、スポンサー契約を締結した。

契約期間は1年。内容は1年間、同社の宣伝活動などで「大阪体育大学硬式野球部女子のスポンサーです」などの文章を使用できる呼称権、ユニフォーム広告（左袖へのロゴ掲出）、硬式野球部女子活動時のバナー掲出、硬式野球部女子公式SNSでの同社PRなど。

大和リースの北哲弥代表取締役社長をはじめ社員、ご家族の方々は、インカレや関西女子硬式野球リーグなど各試合で熱心に応援されている。

横井監督は「応援はとても励みになる。選手全員がサポートに感謝してプレーしている」と話している。



4月からスポンサー契約を結んだ大和リース株式会社の社員の方からも応援いただいている

松平新体制で3位！投手力で秋季優勝狙う

硬式野球部男子

阪神大学野球春季リーグ

硬式野球部男子は、4～5月の阪神大学野球春季リーグは6勝4敗、18ポイントで3位だった。

今季から指揮を執る松平一彦監督は優勝の条件としてチーム打率2割5分、防御率1点台を掲げ、投手は岩崎優太（体育4年・宮崎日本大学）を軸に想定していたが、開幕2週間前に右ひじを痛めて離脱。開幕戦の大阪産業大学戦は投手陣総動員で臨む大一番となった。

先発の加藤祥太（体育4年・広島国際学院）は二回に失策で1点を失うが、スライダーを軸に1安打投球。しかし四回、高田純誠（体育2年・兵庫・報徳学園）にスイッチ。さらに3投手がつないで2失点に抑え、打線が五回に逆転して8－2で快勝。2戦目も5－2で勝ち、連勝スタートを飾った。

第2節は7連覇を達成することになる天理大学に屈したが、続く関西国際大学、甲南大学戦は1勝1敗とし、最終節で大阪電気通信大学に連勝した。

投手は、高田が関西国際大学戦で140キロ超の速球とスライダー、カットボールで完封するなど試合を重ねる中で成長し、抑えの久保伊織（体育4年・兵庫・須磨翔風）、中継ぎの碓永高巳（体育4年・兵庫・明石南）も安定した。

打線は2番から1番に上がった平子真弘（体育3年・日本航空石川）、中軸の弓埜祥太郎（体育4年・大阪・履正社）が軸となり、初の先発マスクとなった捕手の村崎心（体育2年・兵庫・東洋大学附属姫路）も小刻み継投で各投手を好リードした。

初さい配について松平監督は「瞬時の判断が求められるなど、監督とコーチでは野球の見え方が違った」と振り返ったうえで、「優勝できなかったのは残念。秋は復帰した岩崎、高田らが競って軸を作り、投手力で優勝を狙う」と話している。

高田純誠（体育2年・兵庫・報徳学園）

加藤祥太（体育4年・広島国際学院）

平子真弘（体育3年・日本航空石川）

弓埜祥太郎（体育4年・大阪・履正社）

齋藤智也（体育3年・岡山玉野光南）

剣道部

関西学生剣道選手権 佐々木優勝

関西学生剣道選手権大会

第72回関西学生剣道選手権大会が4月28日、大阪市のおおきにアリーナ舞洲で開かれ、佐々木俊（体育2年・福岡第一）が、本学勢として2年ぶりの優勝を果たした。このほか、8強に2人、16強に1人、32強に2人が進出し、優勝の佐々木俊を含めた計6人が、全日本学生剣道選手権大会の出場権を獲得した。

佐々木俊（体育2年・福岡第一）

男子 佐々木俊は、準々決勝で関西大学の選手に面、小手を決めて勝利。続く準決勝、決勝とも、京都産業大学の選手を相手に面を決め、2年生ながら堂々の優勝。村上雷多監督は「勝負強い選手で、当日も徐々に調子が上がっていた」と評価し、「上級生が奮起する機会になったのでは」と話す。

佐々木俊は「2年生なので、挑戦者の気持ちで選手権に臨んだ。決勝では自分が主役だという気持ちで、大学を優勝に導こうと勝負した」と振り返った上で、「日本一をめざして大学に入ったので、それを実現できるよう剣道に励みたい」と意気込む。

同じく体育学部2年の松原正明（大分・明豊）も8強と健闘した。村上監督は「2年生のリーダーを務めていて、伸びしろのある選手」と今後の活躍に期待を寄せる。

また、8強の新垣光司（体育4年・奈良大学附属）、主将で16強の伊東凜太郎（体育4年・大分・明豊）と、4年生の実力者のほか、32強の佐々木健太（体育3年・和歌山東）、杉山颯汰（体育3年・和歌山東）と、3年生も地力を発揮した。特に4年生の新垣、伊東について、村上監督は「序盤で関西のトップ選手に打ち勝っていたので、悔しい結果だったのでは。今年は集大成として活躍してほしい」と声をかける。

今後、秋の関西学生優勝大会、全日本学生優勝大会と戦いが続く。村上監督は「もう一回り強くなってほしいと思う。チーム全体の意識を改革し、稽古を積んで勝てるようにしていきたい」と決意を述べた。

松原正明（体育2年・大分・明豊）

伊東凜太郎（体育4年・大分・明豊）

新垣光司（体育4年・奈良大学附属）

関西女子学生剣道選手権 山下12強

関西女子学生剣道選手権大会

第54回関西女子学生剣道選手権大会が4月28日、大阪市のおおきにアリーナ舞洲で開かれ、山下美羽（体育4年・広島皆実）が12強に進出し、全日本女子学生剣道選手権大会の出場を決めた。

山下美羽（体育4年・広島皆実）

高島愛理（体育4年・北海道栄）

女子 山下は4勝して12強に進出。古川智司監督は「主務を兼ねて出場したので、選手としては厳しい環境だったと思う」と振り返った上で、「大会では徐々に調子があがり、持ち前の粘り強さで勝ち上がることができた」と評価する。

一方、主将の高島愛理（体育4年・北海道栄）が3回戦敗退に終わり、福原栞（体育4年・大阪・英真学園）が2回戦敗退、湯川愛梨（体育4年・愛媛・済美）が1回戦敗退と、4年生の実力者の調子が出なかった。

古川監督は「地力のある選手ばかりで、今後に期待ができる。高い目標を持って、稽古を積んでほしい」と声をかける。

1回戦敗退に終わったが、久保晴佳（体育3年・広島皆実）、田邉悠華（体育3年・大分・三重総合）ら、3年生も着実に力をつけていて、古川監督は「体格のいい選手が多く、力も十分にある」と期待を寄せる。

今後、秋の関西女子学生優勝大会、全日本女子学生優勝大会と戦いが続く。古川監督は「団体の全日本での優勝をめざしたい。しっかりと稽古を積んで力を発揮すれば、叶わないことではない」と自信をのぞかせた。

久保晴佳（体育3年・広島皆実）

福原栞（体育4年・大阪・英真学園）

柔道部

目標切り替えチーム一丸　19年以来の8強入り 全日本へ

関西学生柔道優勝大会

柔道部男子は5月の第74回関西学生柔道優勝大会の初戦で甲南大学を4―2で降して8強入りし、2019年以来の全日本学生優勝大会の出場を果たした。

上田翼（体育4年・奈良・天理）

廣田智大（体育4年・大阪・金光藤蔭）

男子 甲南大学とは昨年の2回戦でも対戦。敗れて全日本を逃した。

先鋒の上田翼（体育4年・奈良・天理）は生田秀和監督から「先鋒が試合の流れを作れ」と送り出された。相手は高校選手権3位の地力のある選手だったが、一本を取り、流れを引き寄せた。次鋒は、「前半勝負」の布陣として、ポイントゲッターの廣田智大（体育4年・大阪・金光藤蔭）が務め、勝利。五将の米澤龍之介（体育3年・長崎日本大学）は落ち着いた試合運びで相手から指導3つを引き出し、反則勝ちで3連勝した。4人目の中堅戦は敗れたが、続く三将の花崎凱阿（体育4年・香川・英明）も勝って、4―2で勝利した。

続く同志社大学戦は廣田の勝利のみで1―2で敗れたが、生田監督は監督に就任した19年以来の全日本に「チームは徐々に底上げし、力をつけてきた。選手は力を出した」と評価した。

全日本学生優勝大会では、1回戦で東北学院大学に4―2で勝利。2回戦で帝京大学に1―4で敗れたが、貴重な経験を得た。

8月には個人戦の関西学生柔道体重別選手権大会があり、その結果は10月の全日本学生体重別団体優勝大会につながる。

今季のチームは、後輩を積極的に指導する新田一心主将（体育4年・大阪・常翔学園）を中心にまとまる。主力の廣田、岩崎竜也（体育4年・山口・高川学園）らのほか、近藤光琉（体育2年・徳島・阿波）、藤澤龍樹（体育2年・英明）らも台頭してきた。次の目標に向け、部員の切磋琢磨は続く。

花崎凱阿（体育4年・香川・英明）

岩崎竜也（体育4年・山口・高川学園）

関西学生柔道優勝大会

5月の関西学生柔道優勝大会は初戦で関西3強の一角の近畿大学と対戦。1―1、代表者戦の末に惜敗した。

森口志保（体育4年・神戸市立科学技術）

中本真奈美（体育3年・福岡・敬愛）

女子 近畿大学戦の先鋒は西村ひかる（体育3年・岐阜・大垣日大）。センスの良さが光る選手だが、一本負け。しかし、主将の次鋒・森口志保（体育4年・兵庫・科学技術）が相手が内股に来たところを内股すかして一本勝ちし、流れを引き寄せた。

中堅の中本真奈美（体育3年・福岡・敬愛）は昨年の関西学生体重別選手権でも4強入りした実力者。終始、優勢に試合を進め、相手は2度指導を受けたが、逃げ切られて引き分けた。

1年生の昨年から団体メンバーを務める副将の増子和奏（体育2年・東大阪大学敬愛）は地力の高い相手に健闘して引き分けに持ち込む。大将の辻野いづみ（体育4年・和歌山・初芝橋本）も有力な相手と互角に戦い、引き分けた。

代表者戦は引き分けた選手の中からの抽選で、もっとも試合で優勢だった中本に決まった。中本は試合を優勢に進めていたが、タイマーの調整で試合が約2分間中断したのが誤算。気持ちを切り替えた相手に内またで技ありを決められた。

松田基子監督は試合後、選手に「中本で負けたのなら悔いはない」と話した。

6月の全日本学生柔道優勝大会では、初戦で帝京平成大学に0―3で敗れた。

松田基子監督は「久々のベスト8入りを目指していたが、残念な結果となった。目標を8月に行われる関西体重別に切り替えて、チーム一丸となって頑張りたい」と話している。

辻野いづみ（体育4年・和歌山・初芝橋本）

増子和奏（体育2年・東大阪大学敬愛）

バスケットボール部 女子

頂点奪還へ

4年連続19回目 関西全優勝

関西学生女子バスケットボール選手権大会

バスケットボール部女子は4～5月の第45回全関西大学女子バスケットボール選手権大会で4年連続19回目の優勝を果たした。村上なおみ監督は「それぞれの試合で失点を抑えて競り勝つことができ、昨年よりも成長の跡が見えた」と評価した。

トーナメントを勝ち上がって決勝リーグに進み、武庫川女子大学に52―51、関西学院大学に75―64。最終戦は大阪人間科学大学に第3クオーターでリードを許したが、65―61で逆転勝ちした。

最大の収穫は、ポイントガードの日高ひかる（体育4年、福岡・精華女子）がゲームキャプテンとしてこれまで以上の安定感を見せたことだ。1年生からレギュラーを務める大黒柱だが、試合での厳しい場面は日高が局面を打開し、最優秀選手賞、アシスト王となった。

センターのアィェビドゥン・グレイス（体育2年、岡山・倉敷翠松）は180㌢と留学生としては長身ではないが、リバウンドの獲得、外からの攻撃、ディフェンスでチームに貢献し、優秀選手賞。昨年新人賞を受けた三次真歩（体育2年・広島皆実）も潜在力は高く、ポイントガードとして成長している。

さらに、U18で日本代表を務めた大型新人のセンター・大上粋奈（スポーツ科学1年、広島皆実）は新人賞を受賞。180㌢の長身に加えて体幹が強く、ゴール下で留学生と当たっても物おじせず体を張ってプレー。グレイスとともにリバウンドを獲得した。普段から「オリンピック選手を目指す」と言い切るほど意識が高い。

ただ、村上監督は反省点として得点力を挙げる。相手を突き放すべきところで突き放せず、「関西で70点から80点は取らないと、関東の強豪とは戦えない」。

日高が教育実習のため欠場した6月の西日本学生選手権大会では、準々決勝で武庫川女子大学に44―51で敗れた。

前回の全日本インカレ優勝から12年。今年は関東の強豪大学の多くで主力の4年生が多数卒業した。一方で本学は要の日高が最終学年を迎え、昨年の新入インカレ優勝メンバーが中核となり、有力な1年生も加わった。日高は「今年はチャンス。4年間試合に出してもらった責任を果たし、自分が決めたい」と意気込む。

村上監督は「最後は、プライドを持って相手のディフェンスをこじ開ける個の強さが決め手になる」。今季は頂点奪回に向け、勝負の年となる。

日高ひかる（体育4年・福岡・精華女子）

アィェビドゥン・グレイス（体育2年・岡山・倉敷翠松）
大上粋奈（スポーツ科学1年・広島皆実）
三次真歩（体育2年・広島皆実）

バスケットボール部 男子

いてよゴールゲッター

関西学生バスケットボール選手権大会／西日本学生バスケットボール選手権大会

バスケットボール部男子は、4～5月の第51回関西学生バスケットボール選手権大会では3回戦で関西学院大学に敗れ、2年ぶりにベスト8を逃し、最終結果はベスト16だった。6月の第74回西日本学生選手権大会では、広島大学に3回戦で敗れた。

関西学生選手権は2回戦で神戸大学に84―51で快勝。関西学院大学戦は、前半は29―20でリードしていたが、第3クオーターで同点となり、第4クオーターで逆転され54―57で敗れた。

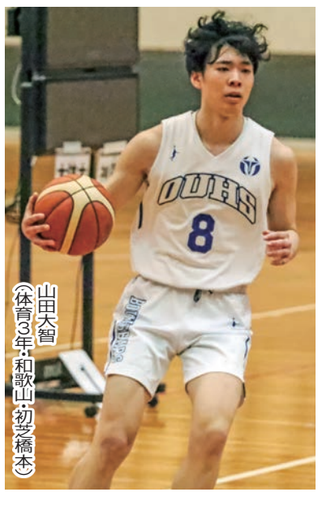
新チームは、主力選手だった仲田泰利、下田平翔が卒業した後、2人のポジションの穴を誰が埋めるのかが課題となった。主将の佐野悠星（体育4年・兵庫・育英）、南口皐（体育3年・大阪）は好パフォーマンスを見せたが、2人以外が精彩を欠き、比嘉靖監督は「納得のいく結果ではなかった。勝負どころで攻撃のミスが多かった。チームがめざす早い展開で、80～90点を取るバスケットができなかった」と振り返る。

西日本学生選手権は、2回戦で中部学院大学に118―67で快勝。広島大学戦は、前半は56―43でリードしていたが、後半の立ち上がりに逆転を許し、93―96で敗れた。

比嘉監督は「バスケットは40分間の勝負。30分勝っていても残り10分で負けることもある。秋に向けての課題は、まず40分間自分たちのバスケットに集中することで、そのためには目的をもって1日1日コツコツと練習に取り組むことが大切。技術面では、佐野や南口のほかに得点を取れる選手が育ってほしい」と話している。

南口皐（体育3年・大阪）

佐野悠星（体育4年・兵庫・育英）


山田大智（体育3年・和歌山・初芝橋本）

リヴァース怜央（体育2年・大阪・藤井寺）

硬式テニス部

行くぞインカレ！

関西学生春季テニストーナメント

男子

テニス部男子は関西学生春季テニストーナメントで、シングルスで3人、ダブルスで2組が本戦に出場。この中でシングルスの北昇馬（体育4年・兵庫・西宮甲英）が8月の全日本学生テニス選手権（インカレ予選）への出場を決めた。

関西学生春季トーナメント・シングルスでは、北はベスト32に進み、そこから順位決定戦を勝ち上がって昨年に続くインカレ出場（予選）を決めた。フォアハンドを軸にパワーがあり、常に自分の試合運びができるメンタルの強さも生かした。しかし串阪達哉（体育4年・和歌山・慶風）は試合1週間前にひざを痛めて欠場。渡邉大樹（体育3年・和歌山・初芝橋本）は初戦で敗れた。

ダブルスの北・串阪組は、串阪が負傷をおして出場し、順位決定戦で勝ってインカレまであと1勝に迫ったが、北が教育実習のため欠場。不戦敗となった。羽田峻也（体育3年・大阪・清風）・村上慈英（体育2年・福岡・柳川）組は初戦で敗れた。

インカレの後は、昨秋の入替戦で1部復帰を果たした関西大学対抗リーグが始まる。主将の串阪はトレーニングでも練習でも高い意識でチームを引っ張るが、けがの影響が気がかり。

昨年の1部リーグ復帰の立役者の2年生、宮崎優良（三重・四日市工業）、平山凜太郎（鹿児島実業）、大西晃平（岡山理科大学附属）、いずれも体育）、村上ら新戦力の奮起が上位進出のカギになる。宮地弘太郎監督は「昨年のメンバー、1年生も加えたチーム力で、3位以内を目指す」と話している。

北昇馬（体育4年・兵庫・西宮甲英）

女子

テニス部女子は関西学生春季テニストーナメントのシングルスで2人が全日本インカレ本戦、ダブルスで2組が全日本インカレ予選の出場をそれぞれ決めた。

シングルスでは、海津美空（体育4年・三重・四日市商業）、岡村凜那（スポーツ科学1年・鹿児島・鳳凰）がともに2勝し、3回戦で対決した。海津は昨年も全日本インカレシングルス予選に出場したチームの大黒柱で、岡村は高校時代、全日本ジュニアでダブルス準優勝した逸材。これまで練習試合では岡村が勝っていたが、大一番では先輩の海津が意地を見せ、勝利。海津はベスト8、岡村もベスト16でともに全日本インカレ本戦の出場を決めた。

ダブルスは、川西由芽（体育3年・大阪・浪速）・籟岸恵（スポーツ科学1年・宮崎日本大学）組がベスト8、海津・岡村組がベスト16で、ともに全日本インカレ予選の出場を決めた。岡村修平監督が2021年に就任して以来、過去最多の出場となった。

今季のチームは、4年生が妥協を許さず真剣に練習に取り組み、チーム力は上がっている。

チームの悲願は、長らく遠ざかる、秋の関西大学対抗リーグでの1部復帰。昨秋は2部3位だった。岡村監督は「圧倒的な力で優勝し、入替戦に進みたい」と意気込んでいる。

海津美空（体育4年・三重・四日市商業）＝右
岡村凜那（スポーツ科学1年・鹿児島・鳳凰）

関西女子春季L3位 組織的守備向上でインカレ制覇へ

関西学生女子サッカー春季リーグ

サッカー部女子は関西学生女子サッカー春季リーグは5勝1分け1敗で3位となった。

北原歩奈（体育2年・山梨・日本航空）

清悠香（体育3年・徳島・鳴門渦潮）

女子　本学はリーグ戦5連勝の後、追手門学院大学に0―0で引き分け、勝ち点16の首位で、最終節の明治国際医療大学戦に臨んだ。

試合は、一時は豪雨となる中、前半終了間際に三代淑世（体育2年・大分・柳ケ浦）のゴールで先制した。後半に2点を失った後、北原歩奈（体育2年・山梨・日本航空）のPKで同点。しかしその後、決勝ゴールを許し、勝ち点で追手門学院大学、明治国際医療大学に抜かれて、3季ぶりの優勝は果たせなかった。

本学は、学生の多数が教員免許の取得を目指すため、春季リーグでは教育実習で4年生を欠くのが〝宿命〟だ。この試合も4年の長谷原彩音（体育・徳島・鳴門渦潮）が欠場し、他の4年生も直前まで教育実習だったため、途中出場となった。

その中で、リーグ戦は下級生を積極的に起用した。1年生では、林寿珠里（大阪桐蔭）、矢野紗也佳（同）がFWを務め、ともにリーグ戦2得点。DF新城琴美（岡山県作陽、いずれもスポーツ科学）も先発した。

2年生では、MF橋本結菜（体育・大阪桐蔭）が後半から出場し5得点。北原も3得点を挙げた。

石居宜子監督は「春季リーグは、4年生が教育実習でいない中で、本学としてはチャレンジするしかない。1年生は先輩のプレーを見ながら、慣れない中でよくプレーしてくれた」と振り返る。18年ぶり4回目となるインカレ制覇に向けて、「チームは、昨年よりも点は取れている。しかし、組織としての守備のレベルを上げていかないといけない」と話している。

林寿珠里（スポーツ科学1年・大阪桐蔭）

矢野紗也佳（スポーツ科学1年・大阪桐蔭）

インカレ返り咲きへチーム一丸

サッカー部

サッカー部男子は第102回関西学生サッカーリーグでは、6月末時点で5勝3敗・勝ち点15で3位につけている。

古山兼悟（体育4年・島根・立正大学淞南）

関西学生サッカーリーグ

男子　初戦の同志社大学戦はJ1セレッソ大阪への入団が内定している古山兼悟（体育4年・島根・立正大学淞南）が後半にPKを決めて1―0で勝利。大阪経済大学には0―4で敗れたが、大阪学院大学戦は増永龍平（体育3年・サガン鳥栖U―18）の先制ゴール、古山の2ゴールで3―2で勝利した。

甲南大学に0―1で敗れ、京都橘大学に野口楓真（体育3年・静岡・藤枝明誠）のゴールで1―0で勝ち、阪南大学に1―2で敗れて3勝3敗。ここから連勝して勢いをつけた。

第7節の立命館大学戦は、前半31分、J1北海道コンサドーレ札幌に内定している木戸柊摩（体育4年・北海道コンサドーレ札幌U―18）から佐野竜眞（体育3年・広島県瀬戸内）とつないで古山が先制ゴール。追いつかれた後の41分は日下部優哉（体育4年・長崎・国見）がゴール。後半も38分に西山隼矢（体育2年・静岡・清水桜が丘）がゴールし、3―2で勝利した。

佐藤陽成（体育3年・北海道コンサドーレ札幌U―18）

木戸柊摩（体育4年・北海道コンサドーレ札幌U―18）

豊田将大（体育3年・サンフレッチェ広島F・Cユース）

続く第8節は昨年優勝の京都産業大学と対戦。0―0の後半24分、佐野のアシストから1年生FWの臼田成那（スポーツ科学・秋田・ノースアジア大学明桜）がゴールを決め、1―0で振り切った。

6月末時点で古山は5ゴールを決めて得点ランキングで2位。佐野は5アシストでアシストランキング2位につける。また、1年生では臼田のほか、DF池戸柊宇（スポーツ科学・京都橘）も主に先発を務めている。

昨年は5位で、全日本大学選手権の出場資格を得る4位にあと一歩及ばなかった。インカレ返り咲きに向け、チームは一丸となっている。

峰田J2レノファ山口内定！

観ている人の心を動かす、熱くなるようなプレーをしていきたい

© nozomi fujita/ouhs

サッカー部男子の峰田祐哉（体育4年）がプロサッカーJリーグ・J2のレノファ山口FCへの加入が内定したことが、4月に発表された。今シーズンは特別指定選手に登録される。

峰田は神奈川県出身。身長187㌢、体重78㌔。東海大学付属相模高校から大阪体育大学に入学した。ポジションはDF。主将を務め、チームの要だ。

峰田は山口FCのホームページを通じて入団の抱負などをコメントしている。

「まずは、これまでの自分の人生に関わってくれた全ての方々の力もあって、ようやくここまで来ることができました。ありがとうございます。小さい頃からの夢であった、プロサッカー選手になることができて非常に嬉しく思います。しかし、やっとスタートラインに立てただけなのでここで満足することなく、日々精進し、もっともっと成長できるよう努力します。これからも、自分を支えてくれる全ての方々への感謝を胸に、観ている人の心を動かす、熱くなるようなプレーをしていきたいと思います」

河野個人準V 演技・男子も3位

なぎなた部

なぎなた部は6月の第43回関西学生なぎなた選手権大会の個人（二、三段の部）で河野葵（体育4年・広島なぎさ）が準優勝。演技、団体、個人男子でも3位となった。

安永心優（体育2年・愛媛・北条）

河野葵（体育4年・広島なぎさ）

関西学生なぎなた選手権大会

天川彰子監督は「2年生中心のチームで、2年生がよく頑張った」と話す。団体は、インターハイ演技競技で優勝経験がある近藤結（スポーツ科学1年・愛媛・北条）が大会直前にケガで欠場。次鋒が自動的に不戦敗になるハンディの中、準決勝で神戸松蔭女子学院大学Aに全員が引き分け、不戦敗のため0―1で惜敗。しかし、3位決定戦は中堅の安永心優（体育2年・北条）が一本勝ちし、2―1で神戸松蔭女子学院大学Bを降した。

演技では、3位決定戦は枡本新（体育2年・新潟青陵）・川口知咲季（同・和歌山北）チーム、高溝遥風（体育2年・福井・鯖江）・河野チームの大体大対決。3―2で枡本・川口チームが勝った。

個人男子は枡本が3位決定戦で近畿大学選手に一本勝ちした。

唯一の4年生の河野は、個人で初戦を一本勝ち。準々決勝は延長戦の末、判定で勝利。準決勝は二本を取って決勝に進出した。3試合連戦となった決勝は延長戦の末に敗れた。

天川監督は「河野は『行くぞ』という攻めがよかった。枡本も昨年より順位を上げて成長している」と評価。8月のインカレに向けて「団体で確実に一本取れる練習をしていきたい」と意気込んでいる。

川口知咲季（体育2年・和歌山北）

枡本新（体育2年・新潟青陵）

パラ陸上第一人者 本学客員教授

山本篤が現役引退

「すごくいい陸上人生を歩んでこられた」

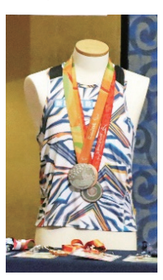
本学卒業生で客員教授も務めるパラ陸上男子の第一人者、山本篤（新日本住設所属）の現役引退会見が5月27日、神戸市内のホテルで開かれ、山本は「すごくいい陸上人生を歩んでこられた」と22年間の競技生活を振り返った。

山本は静岡県掛川市出身の42歳。2008年の北京パラリンピックの走り幅跳びで、義足の陸上選手として日本初のメダルを獲得。夏冬通じて5大会に出場した。

5月の世界選手権では5位入賞で、山本は「可能性がある限りチャレンジし続けるという信念でここまで活動してきたが、自分の中でその可能性が見えなくなった」と引退の経緯を説明した。

今後の活動について、指導者として世界で勝負できる選手を育成することやパラスポーツの認知度向上をめざす活動を行うこと、ゴルフに取り組むことなどを挙げた。

会見では、「恩師との出会いがここまで僕を強くしてくれたし、長く陸上をすることにつながった」と大学時代の恩師への感謝の言葉も述べていた。



水上競技部

男女9種目で表彰台

友田が男子100メートルバタフライ・枡井が女子400メートル個人メドレーで優勝

関西学生チャンピオンシップ水泳競技大会

第12回関西学生チャンピオンシップ水泳競技大会が、5月18、19日の2日間、和歌山市の秋葉山公園県民水泳場で開かれ、友田和志（体育4年・大阪・関西大学北陽）が男子100メートルバタフライで、枡井萌（体育4年・広島なぎさ）が女子400メートル個人メドレーで優勝した。川島康弘部長は「全日本インカレでの決勝ラインも期待できるレベル」と友田、枡井を評価する。このほか、男子4×100メートルメドレーリレーで準優勝、6種目で3位と、水上競技部が男女あわせて9種目で表彰台に立った。

男子では、友田が絶好調。初日の200メートルバタフライでは2分00秒00で3位となり、2日目の100メートルバタフライでは53秒08で優勝した。友田はリレーでも力を発揮し、4×100メートルメドレーリレーを2位、4×100メートルフリーリレーと4×200メートルフリーリレーをそれぞれ3位に導いた。

200メートル平泳ぎでは、野原梨玖（体育4年・大阪・太成学院大学）が2分14秒81で3位となった。4×100メートルメドレーリレーでの2位にも貢献した。

このほか、男子主将の大山仁大（体育4年・三重・尾鷲）、表彰台常連の辻本瑞樹（体育4年・大阪府・桃山学院）といった4年生の実力者だけでなく、田中拓紀（体育3年・岩手・盛岡北）、井上輝星（体育2年・福井工業大学附属福井）、中川凌太（体育2年・桃山学院）、上申陽輝（スポーツ科学1年・大阪・向陽台）もリレーで活躍した。

女子では、400メートル個人メドレーで、枡井が4分54秒10で優勝。200メートル個人メドレーでは、女子主将、山村莉子（体育4年・大阪信愛学院）が2分20秒90で3位となった。

枡井、山村は4×200メートルフリーリレーでもチームを引っ張り、3位に導いた。

このほか、髙邉ひなた（体育4年・大阪体育大学浪商）、林彩加（スポーツ科学1年・京都外大西）もリレーで活躍した。

今後、関西学生選手権、全日本インカレと大会が続く。川島部長は「4年生が責任感を持ってチームを引っ張り、記録にもつながっている。そこへ下の学年が迫るような勢いで取り組めば、今後の活躍に期待ができる」と話した。

枡井萌（体育4年・広島なぎさ）

友田和志（体育4年・大阪・関西大学北陽）

男子4×100メートルメドレーリレー2位（3分46秒47）

男子4×100メートルフリーリレー3位（3分25秒96）

4×200メートルフリーリレー　男子3位（7分40秒97）　女子3位（8分33秒20）

野原梨玖（体育4年・大阪・太成学院大学）

山村莉子（体育4年・大阪信愛学院）

水上競技部

白石、侍ジャパン女子選出

女子野球の第9回ワールドカップ（W杯）ファイナルステージ（7月28～8月4日、カナダ）に臨む侍ジャパンの最終ロースターが4月に発表された。大阪体育大学からは、硬式野球部女子の白石美優（体育4年・京都・福知山成美）が、WBCグループBに続いて選出された。硬式野球部女子監督の横井光治・教育学部講師はコーチを務める。

本学からの侍ジャパン女子代表選出は、2018年の大野七海選手（現エイジェック）以来。

白石はプロチームの京都フローラ、愛知ディオーネで計3年プレーし、2021年に本学に入学。その年の9月の全日本インカレ初優勝に貢献した。

昨年5～6月の第3回BFA女子野球アジアカップに出場し、昨年9月のワールドカップ・グループBで1位となった。

ファイナルステージには、日本、台湾、ベネズエラ、米国、メキシコ、カナダの6か国・地域が出場する。

CLUB MOVIES

大阪体育大学の強化クラブ23部の紹介MOVIEを公開しています。
躍動感あふれる選手のパフォーマンスをご覧ください。
右のQRコードから各部のMOVIEを視聴できます。

ラグビー部

セットプレー、体力面強化でA復帰へ

関西大学ラグビー春季トーナメント大会

ラグビー部は5～6月の関西大学ラグビー春季トーナメントで2勝1敗。昨季Bリーグ1位の本学は初戦でAリーグ5位の立命館大学に7－43で敗れ、下位トーナメントで東海地区代表の中京大学、中国・四国地区代表の環太平洋大学に勝って9位だった。

今季から指揮を執る長崎正巳監督は「Aリーグ勢への勝利に照準を絞ってきただけに勝ちたかった」と悔やむ。

立命大学戦は、前半は強化に取り組んできたDFで格上の相手の攻撃をしのいだ。体を張れる選手、タックルに強い選手を起用。30分まで0－0でしのいだ。

しかし30分にトライを許すと防戦一方に。モールなどコンタクトプレーで劣勢となり、Aリーグ勢との差がパワープレーで出て、7－43で敗れた。

中京大学には31－24で勝利。環太平洋大学にはミスが出て競った展開になったが、25－24で勝利した。

昨季は入替戦で同志社大学に敗れ、5年ぶりのA昇格を逃した。長崎新監督の方針は堅守速攻。シオネ・マウ（体育4年・高知中央）は今季、体もしぼれて調子が良い。ここぞという場面のスクラムではNO8から第一列のフッカーに回り、圧力をかける。堀田凌永（体育4年・京都成章）はラグビーをよく知りプレー中に的確な指示を出す主将。ラインアウトでは中心的なプレーヤーだ。

長崎監督は「近畿大学との練習試合も含めたAリーグとの対戦で、スクラムなどのセットプレーは、強化すればうちの強みにもなることが分かった」と前向きだ。A復帰に向けて、「課題は体力面の強化とプレーの精度アップ」と断言する。

シオネ・マウ（体育4年・高知中央）

小野田武流（体育2年・大阪・常翔学園）

堀田凌永（体育4年・京都成章）

陸上競技部

上級生中心に優勝・入賞ラッシュ

関西学生陸上競技対校選手権大会／日本学生陸上競技個人選手権大会

陸上競技部は5月に京都市で開催された第101回関西学生陸上競技対校選手権大会で、7種目で優勝。3位以内は12種目、入賞は計25種目（優勝含む）となった。また、6月の日本学生陸上競技個人選手権大会では、2位1人を含む6人が入賞を果たすなど健闘した。

関西学生選手権の初日は、本学が近年、好成績を持続している投てきで地力を見せた。男子ハンマー投げで吉田明大（大学院博士前期課程・兵庫・自由ケ丘）が62㍍56で自身4連覇。男子砲丸投げでは、黒田翔貴（大学院博士前期課程・兵庫・伊川谷北）が15㍍50で自身初、大学としては5連覇を飾った。女子ハンマー投げでも川島空（体育2年・大阪体育大学浪商）が2位に入った。

2日目は昨年から躍進が目立つ短距離勢が奮起した。男子100㍍は萩尾脩人（体育4年・大阪・門真なみはや）が10秒43をマークして大学として39年ぶりとなる1位に輝き、男子400㍍も岩﨑拓生（体育3年・大阪）が47秒07で自身初優勝を果たした。また、女子砲丸投げでは中原鈴（体育2年・東大阪大学敬愛）が14㍍17で自身初、大学としては11連覇を達成。中原は最終日に円盤投げでも8位に入り、2種目で入賞した。武田光里（体育2年・奈良・添上）も2位でワンツー・フィニッシュとなった。

3日目は跳躍の女子走り高跳びで和田真琉（大学院博士前期課程・大阪・いちりつ）が1㍍70で大学として23年ぶりの優勝を果たした。また、女子やり投げで川合小想選手（体育3年・三重・松阪商業）が3位と健闘した。

4日目は男子やり投げでドラマがあった。鈴木陸人（体育3年・北海道・帯広農業）、須藤勇大（体育3年・群馬・前橋育英）とも5投までは記録が伸びず表彰台圏外だったが、他の種目がすべて終了し、スタンドの注目が集まった6投目で鈴木が自己新の70㍍16を投げトップ。その直後に須藤が「鈴木が自己ベストを出し、負けるわけにいかないと思った」と71㍍69の自己新で抜き去り、大逆転でのワンツー・フィニッシュとなった。

また、男子3000㍍障害物でも松清碧海（体育4年・大阪・金岡）が9分16秒69で3位となった。

大会を通して、陸上競技部は投てき、短距離、跳躍で優勝したほか、長距離でも表彰台をつかみ、幅広い種目での健闘が光る大会となった。対校得点は、総合得点で男子1部6位（76点）、女子5位（46点）、フィールド得点で男子1部2位（46点）、女子2位（46点）だった。

また、6月に神奈川県平塚市で開催された日本学生陸上競技個人選手権大会では、女子走り高跳びで、和田が1㍍70をマークして2位に食い込み、関西インカレで記録なしに終わった森岡未優（体育4年・大阪・関西大学北陽）は1㍍70で6位に入って雪辱した。男子400㍍では岩﨑が47秒81で6位、やり投げで須藤が68㍍97で5位、女子は砲丸投げで中原が14㍍29で5位、ハンマー投げで川島が56㍍59で8位入賞した。

陸上競技部の髙本恵美部長は関西インカレについて「上級生・大学院生を中心に、優勝・入賞が多数あった。日ごろから継続してコツコツと取り組んでいた学生の活躍が目立ったように思う。思うような成果が上げられなかった学生や出場できなかった学生には、これらの学生に続くべく、目標を明確にもって日々の積み重ねをしてほしい」と総括している。

吉田明大（大学院博士前期課程・兵庫・自由ケ丘）

黒田翔貴（大学院博士前期課程・兵庫・伊川谷北）

中原鈴（体育2年・東大阪大学敬愛）

武田光里（体育2年・奈良・添上）

日々の努力が成果に

ワンツー・フィニッシュ

須藤勇大（体育3年・群馬・前橋育英）

ドラマチック・ワンツー・フィニッシュ

鈴木陸人（体育3年・北海道・帯広農業）

川島空（体育2年・大阪体育大学浪商）

女子走り高跳び 23年ぶり

和田真琉（大学院博士前期課程・大阪・いちりつ）

男子100㍍ 39年ぶり　男子400㍍ 自身初

萩尾脩人（体育4年・大阪・門真なみはや）

岩﨑拓生（体育3年・大阪）

◆第101回関西学生陸上競技対校選手権大会（5月22～25日、たけびしスタジアム京都）

【男子】▽100㍍　①萩尾脩人10秒43▽200㍍　⑥萩尾脩人21秒30▽400㍍　①岩﨑拓生47秒07▽3000㍍障害物　③松清碧海9分16秒69▽棒高跳び　⑦山本湧斗4㍍90⑧山口悠登4㍍80▽砲丸投げ　①黒田翔貴15㍍50⑤中松暖弥13㍍68⑦濱田茉裕13㍍60▽円盤投げ　⑥吉原白虎42㍍23▽ハンマー投げ　①吉田明大62㍍56（4連覇）⑥湯浅可絃54㍍52▽やり投げ　①須藤勇大71㍍69②鈴木陸人70㍍16▽十種競技　④三和龍之介6440点

【女子】▽走り高跳び　①和田真琉1㍍70▽走り幅跳び　⑧浅野利佳5㍍61▽砲丸投げ　①中原鈴14㍍17②武田光里13㍍31▽円盤投げ　⑧中原鈴37㍍48▽ハンマー投げ　②川島空57㍍10⑤藤田唯愛53㍍06⑥大濱未結52㍍78▽やり投げ　③川合小想51㍍04⑧小松夏歩44㍍69

【対校得点】▽男子1部総合得点　⑥76点▽男子1部トラック得点　⑦25点▽男子1部フィールド得点　②46点▽女子総合得点　⑤46点▽女子フィールド得点　②46点

◆日本学生陸上競技個人選手権大会（6月14～16日、神奈川県平塚市）

【男子】▽400㍍　⑥岩﨑拓生47秒81▽やり投げ　⑤須藤勇大68㍍97

【女子】▽走り高跳び　②和田真琉1㍍70⑥森岡未優1㍍70▽砲丸投げ　⑤中原鈴14㍍29▽ハンマー投げ　⑧川島空56㍍59